

労働組合運動の基盤拡大と強化を

金属労働研究所理事 芹澤 寿良

昨年(2012年)は、労働組合運動とともに歴史の古い世界の協同組合運動が国連の定めた「国際協同組合同年」を祝い、わが国でも各種の関係組織が協力して記念事業活動を行って、11月には「いま、『協同』が創る2012全国集会」(1400人参加)が開催された。そして今年2月に、日本労働者協同組合(ワーカーズコープ)連合会が監修し、東京下町の墨田区を舞台に働くことの意味を問い直すドキュメンタリー映画『ワーカーズ』が完成、上映された。これは「協同労働」という働く人が出資し、地域で必要とされる仕事を自分たちで切り開くという姿を記録したものであった。その直後、NHKの番組「クローズアップ現代」で「働くみんなが“経営者”雇用難の社会を変えられるか？」がこの問題が取り上げ、協同組合運動の専門的研究者の一橋大学名誉教授の富沢賢治氏がコメンテーターとして、今日における「協同労働」のもつ意義を解説された。

歴史的に労働組合運動とともに、働く者の生活の防衛、拡充の要求から生まれ発展した協同組合運動が、今日の経済、雇用、生活のさらなる危機の深まりのなかで介護・福祉、子育て、公共施設運営などさまざまな分野で「協同労働」(ワーカーズコープ)への関心が高まり、その「協同組合」づくりの取り組みが全国の地方、地域で進んでいる。映画『Workers ワーカーズ』は、その具体的な取り組みの姿を生き生きと伝えており、各地の上映運動の機会には、是非ご覧頂くことをお勧めするものである。

私も、わが国でのこの運動の歴史的な経過と現状を、関係者の話を聞き、方針、資料を読んで大よそ知ることができたが、経過のなかで生じた考え方、進め方をめぐる意見の相違は、具体的には運動の積み重ねを通して時間をかけて基本的に克服され、そのことが今日、各分野での「協同労働」の創意ある「協同組合」が地方、地域に生み出されているのではと思っている。

協同組合関係の諸組織は、連合、全労連の各ナショナルセンターや多くの産業別組織の協力、賛同も得て、足かけ10年にわたって、こうした「協同労働の協同組合」の法制化を求める運動を進めてきており、制定に向けてあと一歩という段階にあるとされている。その1つ、日本労働者協同組合連合会(日本労協連)は、2012年7月の全労連大会に連帯のメッセージを送り、これまでの法案作成等への助言、協力に感謝しつつ、一層の協力を要請し、「人間らしい労働と人と地域に役立つ仕事を通じて、全労連との連携を通じて働く者の復権と地域の再生に向けた活動に取り組んでいく」との決意を表明している。

私は、全労連が、今日の新しい情勢下で、日本労協連などとの協議を進めて協力関係を確認すること、傘下の地方と地域の運動組織が「協同労働の協同組合」の協力組織としての関係を確認すること、こうした関係確立を通して、労働組合運動と協同組合運動が推進されていくなれば、社会改革の基礎的土台と厚い運動力量が構築され、国民諸階層の労働・社会運動全体に対する信頼と期待感は大きく高まることにはなるのではないだろうか。

過去に拘ることなく、実際の姿、現状から出発して協同組合運動と労働組合運動の新しい関係強化を考えて欲しいと思っている。☑